

## パーソナルスペースへの他人の侵入がもたらす指示領域及び生理面への影響

福田裕美, 森田 健 195

久野 覚 [名古屋大学大学院環境学研究科都市環境学専攻  
教授・工博]

パーソナルスペースに対する他者の影響について、心拍数・血圧など生理的指標を加えた分析である。顕著な差が頭れたと言うほどではないが、有意差の出た分析結果は納得のいくもので、非常に有意義な結果であろうと思う。

心拍の最大波であるR波の間隔は一般に心拍の波長を示すもので、その変動係数は動搖の度合いを示している。微妙なものではあるが、他者の存在やその存在を隠すことによって変化するという結果は興味深い。生理的変化そのものは、建築設計に直接応用できるものでは必ずしもないが、このような裏付けは、パーソナルスペースについて細かな配慮をする必要があるという建築学の観点からは重要であると思う。今後より一層の研究に期待したい。

西出和彦 [東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 助教授・工博]

人間の持つ心理的領域であるパーソナルスペースは、目に見えない時と状況によって変化するもので、誰もが存在を感じ、環境デザインの上で把握しておくべきものと認識していくながら、その実体をとらえることは大変難しいものである。それを言葉である指示代名詞を用いる方法と数量的に生理的指標をとる方法という性質の全く異なる2つの方法を関係させながら、自分の領域と他人の侵入、間仕切りの存在、圧迫感それぞれの相互関係的一面を解明した。言葉の使い分けはネイティブの語感といふいわばブラックボックスに頼るものであるし、それぞれの指示領域の意味づけができるものではない。生理的指標は数字がはっきり出るものその数字の大小が何を意味するのか必ずしも明確でない。この研究はこれらの「何かもう少し意味付けの欲しい指標」どうしを関係付け、それぞれの指標の意味を理解する可能性を拓いたところに意義があるといえよう。

## 市街地形態の異なる街区の温熱環境比較に関する実測研究

森山正和, 宮崎ひろ志, 吉田篤正, 竹林英樹, 足永靖信, 成田健一, 依田浩敏, 土井 正 199

片山忠久 [九州大学大学院総合理工学研究院エネルギー環境共生  
工学部門 教授・工博]

日射・放射と風速が街区の温熱環境に及ぼす影響に関しては、遠く9年前とはいえ既に自明のことである。その状況において、新たな知見を獲得すべく、労多く益少ない実測を行なった意気込みやよし。ただし、得られた結果が意図するところとは程遠いものであることは、著者らも認識しているであろう。現時点の知見に則した実測を望みたい。

実測時の気象状況に関して、期間中、一時的ないし時々曇りや雨の日のみであり、日程が限定されやり直しが利かないとはいえ残念である。実測結果に関して、大きな公園緑地の周辺に設定されている3つの測定点における気温の高低の順序は、公園緑地からの距離の順になっており、これは街区の特徴によるのか公園緑地の“にじみ出し”の影響によるのか。また、各街区におけるMRTやSET\*の4つの測定点間の差は、各街区の平均値間の差と同程度であり、市街地形態、街区の特徴と温熱環境との関係は必ずしも明確ではない。

大岡龍三 [東京大学生産技術研究所 助教授・工博]

本報告は、典型的な低層密集街区、中層街区、高層街区という3つの異なる市街地形態の温熱環境を、近傍の樹林地を基準とすることにより、実測値の相互比較を行いそれぞれの特徴について検討を行っている。各市街地の気温が夜間において樹林地のそれとの差が小さくなるという点が、従来のヒートアイランドは夜間において顕著となるという一般的な知見と異なるが、天空率とMRTとの関連、高層街区における風通しのよさがSET\*の低下に寄与する等、従来のシミュレーションモデル等により推定された結論を裏付けるものである。今後、この実測結果を、より詳細な実測条件とともにデータベースとして公開することが、シミュレーションモデルの検証資料、屋外温熱環境設計の設計資料として有用なものとなると期待される。

## 在宅要介護高齢者の生活と住要求に関する事例研究

村田順子, 田中智子, 瀬渡章子 203

在塙礼子 [埼玉大学教育学部家政教育講座 教授・工博]

本報告は、今後の介護保険制度の見直しを視野に入れて、要介護認定を受けた高齢者の生活や住まい方の現状を明らかにすることを目的としたものである。調査対象地域に、旧市街地、ミニ開発住宅地、農村地域、ニュータウンという特徴ある4地域から構成される町を選定したこと、また、丁寧な訪問調査を重ねたことによって、高齢者の生活の姿を実感こめて多面的に描きだすことに成功している。多面的であるだけに、個々の指摘についてはやや新味に乏しい面もあることは否めないが、家族同居の高齢者の方がより有効にサービスを利用していることや、地域によるニーズの違いも結局は家族関係の相違であることなど、介護保険制度のもとでも家族の役割への期待が大きいとの指摘には説得力がある。在宅ケアのためのソフトとハードの条件とそれに的確に対応できる介護保険制度に向けて、より明確に課題が提示されていくことに期待するものである。

斎藤功子 [池坊短期大学環境文化学科 助教授・博士(学術)]

本事例研究は、要介護認定を受けた高齢者28人の生活や住まい方について、実態把握を試みたものである。本来、このような調査は、介護保険の実施主体である市町村によってもなされるべきものであるといえようが、情報開示が不十分な現状においては、本事例研究のような地道な積み重ねは貴重といえる。近年、建築学の分野においては、在宅要介護高齢者の生活実態に関する研究の蓄積は見られるが、介護保険施行後の研究実績はまだまだ乏しく、介護保険利用者の生活実態を家族形態・居住地域の特性ならびに住宅改造の側面より分析する本事例研究の意義は大きい。サンプル数は限られたものであるが、市町村により介護保険事業所数もサービス内容も異なるという状況があるだけに、今後、研究が継続される中で、家族形態や居住地の地域性、住宅の状況に見合った介護保険制度の見直しを提言されることが期待される。